

西明寺円測の教学

吉 田 道 興

慧沼（650～714）撰「了義灯」は、大半が円測（613～696）の批判に終始している。以来、円測は、慈恩系から異端視されてきたのは周知の通り。しかし慧沼は慈恩大師窺基（632～682）撰「述記」と種々に異説がある点を批判しているのである。円測撰「解深密経疏」中、真諦説と玄奘説を比較するに真諦説を依用することもあるが、むしろ師玄奘を通して護法唯識を正しく把握しようとする傾向がみられる。従つて「了義灯」の批判はそれとしても根本的に円測の思想を改めて開明する必要がある。この小論はその一環として彼の背景になつてゐる教学の面に焦点を当ててみたい。まず初めに行実をたどらなくてはなるまい。

円測の伝記資料には次の四本がある。（一）新羅の文豪崔致遠（857～*）撰の祭文「故翻経証義大徳円測和尚諱日文」（智異山大華嚴寺事蹟）、（二）贊寧（919～1001）撰「唐京師西明寺円測伝」（宋高僧伝巻四）、（三）宋復（*～1130）撰「大周西明寺故大徳円測法師仏舍利塔銘并序」（玄奘三蔵師資伝叢書下）、（四）曇暉

（1285～*）撰「周円測」（六学僧伝巻二三）。詳しい伝記の内容や比較の検討は略すがその四本を勘合して概略次の事柄が知られる。——諱は文雅、新羅の王族出身、三歳出家十五歳請業（得度）という。幼児より聡明で語学の才があつた。初め撰論の大家法常（576～645）や僧弁（568～642）に受学し、さらに玄奘（600～664）が帰国すると一見契合して師資關係を結んだ。窺基より先に瑜伽論・成唯識論を講述した。則天武后の帰依を受け、元法寺に住し、また西明寺の大徳となつたが単なる学者ではなく山水の閑寂を好んだ。晩年に長安で地婆訶羅の密厳経や顯識論等の訳出に証義の任につき、また後に洛陽で実叉難陀の八十華嚴訳出事業に参加したが訳了しないうちに仏授記寺において万歳通天元年（696）七月二二日八四歳で遷化した。特に大徳という敬称や証義という役名からその人格と学殖の程が伺われることに注意したい。

撰述書は多数あつたと思われるが次の十六本が知られてゐる。解深密経疏十卷、仁王経疏六卷、般若波羅蜜多心経贊一

卷、成唯識論疏十卷、成唯識論別章三卷、唯識二十論疏三卷、金剛般若經疏(？)、觀所緣々論疏二卷、無量義經疏三卷、百法論疏一卷、正理門論疏二卷、瑜伽疏二五卷、六十二見章一卷、阿彌陀經疏一卷、広百論疏十卷、俱舍論釈頌疏鈔三卷(以上、平祚録・義天録・永超録・藏俊録・興隆録・鳳潭録・円珍録・奈良朝現在録・法相法門録・宋復撰円測塔銘に拠る)。これらの撰述書の傾向を見るに(一)唯識、(二)中観、(三)毘曇、(四)涅槃(浄土)と分類できよう。この十六本中、現存するのは最初の三本であり、他は散佚している。中でも成唯識論疏が散佚していることは、これと「述記」との比較ができない為に彼の立場を一層不利にしている。しかし彼の唯識説は先の「了義灯」を初めとして智周(668?723)撰「演秘」、太賢(*?764?*)撰「学記」、善殊(723?797)撰「肝心記」「了義灯増明記」、常騰(740?815)撰「了義灯鈔」等で直接的かつ間接的に引用ないし批判されているので大凡の輪廓を浮かび上がらせることは不可能ではない。なお結城令聞氏が窺基撰とされている成唯識別抄を疑問視され、円測撰とする方が多分の理が存する(「唯識学典籍志」といわれているのでこれも考慮する必要がある)。

次に円測撰の現存三本(解深密經疏十卷(円統一—三四・三五)、仁王經疏六卷(正蔵三三、円統一—四〇)、仏説般若波羅蜜多心經贊一卷(正蔵三三、円統一—四二))中に引用されている経

論を列記して彼の教学の一端を見よう。なお解深密經疏十卷は統蔵本には卷八の首と卷十を欠くが稻葉正就氏によつてその散逸部分を西蔵本(法成訳。北京五五一七)から漢文に還元されている(「谷大研究年報二四」)。その学恩に感謝したい。――
〔阿含部〕長阿含、梵摩喻、雜阿含、央掘摩羅、増一阿含。
〔本縁部〕報恩、一切智光仙人、普曜、因果、仏本行、十二遊、賢愚。〔般若部〕大品、放光般若、光讚般若、道行般若、小品、勝天王般若、金剛般若、能断、仁王。〔法華部〕法華、正法華。〔華嚴部〕無量義、普賢觀、旧華嚴(六十卷本)、新華嚴(八十卷本)、本業、十住断結、十地。〔宝積部〕宝積、法鏡、勝鬘、如来莊嚴功德。〔涅槃部〕無量寿、觀無量寿、梁本涅槃、中陰、大雲(大方等無想經)。〔大集部〕大集、(大方広)十論。〔經集部〕賢劫、伽耶、文殊(師利)門、大不思議・不可思議(維摩)、(梵天所問)思益、無垢称、須真天子問、首楞嚴三昧、瓔珞、金光明、無上依、四卷楞伽、入楞伽、大乘同性、証契、深密、解節、相統解脱、仏地、密嚴、福田、法集、諸法最上王。〔密教部〕無量門微密持、阿難目佉陀羅尼、大方等陀羅尼。〔律部〕五分律、四分律、善見論、舍利弗問、梵網、優婆塞戒。〔釈經論部〕智度論、金剛仙論、功德施論(金剛般若波羅蜜經破取者不壞假名論)、法華論、十住婆沙論、十地論、宝積論、仏地論、勝思惟梵天所問經論。〔毘曇部〕集異門足論、法蘊足論、発智論、大毘婆沙、旧婆沙(阿毘

曇毘婆沙論、毘曇（＝阿毘曇心論）、雜（阿毘曇）心論、俱舍、旧俱舍（＝俱舍釈論）、順正理論、（阿毘達磨）顯宗論。（中観部）中論、般若灯論、広百論、掌珍論。（瑜伽部）瑜伽論、瑜伽釈、地持、善戒、決定藏論、成唯識、三十唯識、唯識論（流支訳）、二十唯識、撰論（真諦訳）、撰論（玄奘訳）、撰論釈（真諦訳）、大業論（＝笈多訳撰論釈）、撰論釈（玄奘訳）、無性釈、中辺分別、弁中辺、顯揚、莊嚴、（阿毘達磨）集論、雜集論、仏性論、宝性論、五蘊論、（正法）正理論、十八空論、三無性論。（論集部）入正理論、成実論、解脫道論、発菩提心経論、菩提資糧論、起信論（真諦訳）。（史伝部）異部宗輪論、西域記。（逸亡・不明経論）阿毘達磨經、十七地経、世親般若論、金剛般若記、金剛波疏、七事記釈、真諦記、金光明記、解節記、九識章、部執記、中辺分別論記、転法輪論、雜心釈、雜集釈、広百釈、唯識八巻疏、二諦章、浄土章、二号章、大蔵経、大界経、愛味経、集法経、陀羅尼経、普明王経、過去七仏経、衆持経、文殊般若闍者懺悔経、五神王因縁経、比丘応供法行経、勝鬘論、宝鬘論、大有経。この逸亡・不明経論中には、真諦撰述とされるものや一応想定されても確定できないものが含まれる。なお現在漢訳がなく西蔵訳だけとされる清弁の中観心論（入真甘露品）と陳那の集量論が各々解深密経疏巻三と巻十に引用している。これは恐らく断片的に漢訳伝来されたものであろう。崔致遠撰の諱日文に「語將通於六

国」とあるが、円測が通達していた六ヶ国語中に西蔵語が含まれていたかは不明である。これらの問題は今後の研究に期したい。

これらの経論は現存する三本に限られ、また各教義に関連するものであるから他の撰述書の範囲まで広げて円測の教学を述べつくすことはできない。しかしその博引傍証ぶりからいつても決して窺基に劣るものではない。上記の撰述書の傾向と仁王経疏・心経賛の引用（空観の唯識的見解）例からいつても唯識論の一方の法將であつた。法常・僧弁から撰論を聴講、その上に玄奘から瑜伽・成唯識を命付されているのであるからそれなりに確かなものといえる。周知の通り、慈恩系から「測略守門者隱聴（中略）基懷其有奪人之心」（宋高僧伝巻四）や「六学僧伝巻二三」の批難は窺基より先に瑜伽・成唯識の講述したことを否定していない。むしろそのように批難される程に円測の存在が偉大であつたことの証左となつている。晩年に終南山雲際寺から三十余里離れたところに闍居して八年間静志していたが、西明寺僧徒の屈請によつて再び成唯識論を講じている。さらに実叉難那の訳業に証義として従事中に遷化している。もつて大徳と敬称されるゆえんである。なお仁王経疏中には、新華嚴（訳出696～699）の引用がある点から最晩年の著述であるということがいえる。